

自筆本倭訓栞の語種分類について

The lexical stratification of terms in the author's manuscript of Wakun No Shiori

平 井 吾 門*

Amon HIRAI*

要旨

近世の国語辞書「倭訓栞」には、和語や漢語だけでなく様々な出自の言葉が収録されている。それらを語種の観点から分類することの意義と課題を述べる。特に、初期稿本である編者・谷川士清自筆本の語彙を分類することで、成立過程における編纂態度の変化が浮き彫りとなった。自筆本倭訓栞では、起稿当初は和語を中心に語彙の収集を行っており、書名の「倭訓」もこれと密接に結びつくものと考えられる。一方、編纂が進む中で漢語や外来語を積極的に増補するようになり、語種に拠らずに国語の総体を示す辞書が目指された可能性を指摘できる。

キーワード：谷川士清、国語学史、語彙分類

1 問題の所在

伊勢の国学者・谷川士清（1709～1776）によって編纂が始められた倭訓栞は、その子孫を中心に110年かけて編纂・刊行が続けられ、前・中・後編合わせてのべ約2万語を収録した全93巻の国語辞書である。雅言集覧・俚言集覧とともに、近世の3大国語辞書として知られ、その最も早いものとして国語辞書史上に大きな価値を有している。諸本としては、初期稿本である「谷川士清自筆本（自筆本）」、刊行直前の姿を示すとされる転写本「谷川清逸転写本（清逸本）」、最終的に刊行された「整版本」、明治以降に出版された活字本二種が知られている¹⁾。

さて、整版本倭訓栞に置かれた「凡例」には、「雅語あり俗語あり雅語に讀書詞あり詠歌詞あり俗語に官府詞あり叢林詞あり雅俗ともに熟語あり縁語あり倭語に似て漢語あり韓語あり梵語あり蛮語ありこれら悉く類をもて聚めぬ」と書かれている²⁾。実際に整版本倭訓栞（前編）を眺めてみると、冒頭の「あ」部においても「あふひ（葵）」「あうん（阿吽）」「ありなれかは（鴨緑江）」のように、和語・漢語・混種語（朝鮮語＋和語）を拾い出すことが出来る。

倭訓栞の特色について述べた先行研究の中には、収録語彙について「和語だけでなく外来語や雅語・方言などを収録している」（「日本語大事典」朝倉書店、

2014）のように語種についても言及したものが少なくない。先行研究の多くは、「凡例」に書かれた内容を受けているものと推察されるが、このような概略についての指摘がある一方で、倭訓栞収録語の語種について詳細な調査をしたものは管見の限り見られない。

無論、倭訓栞が多様な語種から成る辞書であることを示すだけであれば、網羅的な調査は必ずしも必要ではない。「あ」部を見るだけでも多様な語種から成ることは明白だからである。しかし、「様々な出自の語を含む」と述べるだけでは、倭訓栞の性格を正確に捉えることは出来ない。特に、日本書紀研究に端を発すると言われる倭訓栞だが、そうであるとすれば編纂が開始された当初には、外来語は入り難いことなどが容易に想像される。

また、収録語彙の語種に関する問題は、倭訓栞の書名に付された「倭訓」とはそもそもどのようなことを意図しているのか、という大問題にも繋がるものである。「倭訓」という言葉の意味を考えたとき、「和語を集めることが目的の辞書」や「漢語に対応する和語（訓）を示すことが主眼の辞書」など、様々な状況が想定される³⁾。

これらを検証していくためにも、倭訓栞の語種に関する詳細な調査及び分析は必須であることは明白である。倭訓栞研究における語種の本格的な調査を見据えて、本稿では初期稿本と目される自筆本の語種を分類

*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

し、その意義と課題を考察するものである。

2 語種分類の問題点

語種は、次のように定義されている。

語彙論で単語を分類する一つの方法で、その語の出自からみた語の分類である。

(「日本語大事典」)

そもそも、語種の特定は難しいものがある。その要因として、語種を考える上で語源の考察が避けて通れないからである。言葉の語源は古来人々を魅了し、上代文献に見られる地名由来譚を初めとして数多くの語源説が説かれてきた。江戸時代には「日本釈名」など独自の語源説を展開する書物が数多く編まれており、その需要の高さがうかがえる。しかし、全ての言葉に対する語源を探ることが難しいのは半ば常識であり、妥当性の高さが認められる語源説がある一方で、学術的な根拠を提示し難い語源説が多々あることもまた世間の共通理解となっていよう。

現代でも語源についての関心は高く、国語辞書に語源説を提示することも珍しくはない。「日本国語大辞典」(第二版、小学館)では各種の語源説を併記するスタイルを採用しているが、それは現代の水準であっても日本語に属する全ての言葉の語源を一つに決められないことの証でもある。

江戸時代に編纂された倭訓栞は、語源説を多く収めた辞書としても知られている。「日本国語大辞典」にも語源説の典拠の一つとして多々利用されているほか、インターネット上でも倭訓栞の語源説を根拠にした様々な記事を認めることが出来る(これは、一般には何となく権威がありそうな江戸時代の書物であり、活字本が普及しているとともに五十音引きで引きやすいためであろう)。

倭訓栞に収められた個々の語源説を全面的に検証していくような作業は、具体的な成果に乏しいことが十分予想される。特に、倭訓栞では典拠を示さずに先行書物からの孫引きが行われており、どの語源説が土清のオリジナルであるのかを見極めるのが極めて難しく、また、「～とか」などとして語源説の一端を紹介していると思しき用例も多いことから、体系的な語源説研究は避けられてきた嫌いがある。

本稿でも倭訓栞の語源説を考察するつもりはなく、それだけの材料も無いのであるが、語種を考える上で

はその拠り所となる語源の基準を明確にしておく必要がある。ある言葉を取り上げた際、現在考えられている語種は妥当性のある語源説に基づくものであると言えるが⁴⁾、倭訓栞収録語彙の語種は、必ずしもそれらと一致するわけではない。本稿では、倭訓栞の編纂過程の解明を進める立場から、土清の考えていた語源に基づく語種の分類を行うこととする。

3 土清の語種意識

自筆本倭訓栞には、次のように語種に関する記述が随所に見られる(以下、巻・丁数・表裏・掲載場所を示す)。

いがひ	貽貝也音をもて訓とせる也 (1-44o 罫線部)
いつそ	いつその事いつそになといへり一 の音にや (1-55o 余白部)
じねんこ	西土の書に自然粉と見ゆ和語にあ らず竹実をいへり (3-39u 罫線部)
はにし	土師をよめりはじとのみよむは略 也しはずと通す師の音にあらず (5-31u 罫線部)
びいどろ	硝子をいふ蛮語也 (5-48o 余白部)
へび	反鼻也和語にあらず (5-57o 罫線部)

ここに見られる記述からは、語種に対しての強い意識を読み取ることが出来るとともに、現代的な感覚に通じる語種認識があったことが窺える。

また、余白部を含めて、自筆本倭訓栞に載せられる外来語は、原則として漢字文献を通して接した欧米語である(蛮語、と記される)。漢字表記のフィルターを経ることで、どこまで外来語としての意識が残存していたかは慎重に探らねばならないが、少なくとも漢語との差異は考えられていたものと思われる。

さらに、次のように、土清が出自を確定できずに複数の可能性を示したものもある。

かはら	瓦をいふわとはと同韻なれば是も鱗 甲の意にて名けしにや一説には梵語 也といへり (2-42o 罫線部)
-----	---

このことから逆に、明確な語種の分類意識が感じられるのである。

4 調査内容及び方法

自筆本倭訓栞には、三澤(2006)で示されたよう

上 段 部	あしのまろや 葦の丸屋 他まは全き義全体を 葦のみにてこしらへたる也
	魚と見えたり是擬らくは葦鹿を謬り たるなるへし
	あをによし 奈良の枕辞にいへり萬 葉に緑青吉と書り袖中抄にもむかし
	奈良坂に青土ありと畫家の丹青に用る よし見えたりには土はにとよめはその略也
	あらかね 荒金の義土中の鏝をいへり
	よて荒金之土と属けり真金に対す
	あしを 日本紀に縉をよみ倭名抄に 攀をよめり足緒の義也
	あしつを 鴉尾琴に着し緒をいふと
	長歴官符に見えたり是も足付緒の義也
	あらまき 倭名に苞瓦をよめり荒纏の義也 宇位拾遺に鯛のあらまきと見えたりつとをいふ也 あらか上 洗濯をよめり大和物語にあらはひと いへり 神代紀に頸飾をよめりあらはるといへり
	余 白 部
	罫 線 部

に、用箋の部位によって大きく「罫線部」「余白部」「上段部」に分けられる【図】。

そして、平井（2012）で指摘したように、これらの各部分には編纂過程における先後関係が認められ、原則として罫線部→余白部→上段部の順に成立したものと考えられる。

本稿では、自筆本の罫線部と余白部を比較する。上段部は本文への追記も多く、体系立った体裁は整っていない。一方、余白部は罫線部と同様に「見出し語句一語釈」という体裁が概ね整っており、語源説を含んだ語釈も状況に応じて採用されていることから、罫線部の本文と対照可能である。そのため、罫線部から余白部へと編纂が進む中で編纂態度の推移を観察するのに適していると考えられるのである。

罫線部及び余白部に記された語彙に対して、次のような基準で語種を認定していった。

- ①一文字見出しと空見出しは対象から外した。
- ②字音語や外来語であることを明示している場合、或いは明らかに字音語である場合に、それぞれ漢語や外来語と認定した。それ以外は原則として和語とした。なお、梵語及び朝鮮語も同様である一方、オノマトペやアイヌ語、琉球語に関しては和語に含めた。
- ③現代では字音語と考えられるものであっても、「音が訓となった」旨が記載されている場合には和語とした。
- ④「しみ→①染み②衣魚」のように、同一見出し

であっても語源が明確に異なるものはそれぞれ計数した。

⑤一方で、「～からの派生語だ／同源の言葉だ」と示されているものは、語種を探る観点から一つに纏めた。

5 調査結果

まず罫線部について、見出し項目数は全部で2884あり、そのうち前節で示した基準に基づく述べ語数は3125であった。各語種の内訳を以下に示す。

和語	2941	(94.11%)
漢語	95	(3.04%)
外来語	4	(0.13%)
混種語	26	(0.83%)

次に、余白部について出し項目数は全部で1197あり、そのうち3節で示した基準に基づく述べ語数は1245であった。各語種の内訳を以下に示す。

和語	1002	(80.56%)
漢語	154	(12.29%)
外来語	20	(1.61%)
混種語	52	(4.18%)

また、余白部には編者・谷川土清がその出自を迷った挙句に両方とも示した項目が3例見られた。

まず、一見して指摘出来ることは、罫線部と余白部との語種の出現割合の相違である。罫線部では和語が94%を超える圧倒的な出現率を誇り、漢語が僅かながらそれに続いている。外来語と混種語については、その存在が極めて特殊であることが一目瞭然である。罫線部を編纂していた段階では、原則として和語を収めることが主目的であり、翻って罫線部に収められた漢語・外来語・混種語については、和語の中に溶け込んでしまうような、漢語としての意識の薄い語彙と捉えられる。3節に挙げた「和語にあらず」の指摘はその表れである。

余白部では、和語が全体の中で圧倒的な存在であることは動かないが、その割合は8割強に留まっている一方で、漢語が1割を超えており存在感を増している。また些かではあるが、混種語や外来語も無視できない存在に成っていると言える。すなわち、和語の増補を重ねつつも、漢語及び外来語に関しては、増補時に明確な意識を以て増補されている。

当初は和語を中心とした語を意識的に選び取って

る、そして、それでは飽き足りない何らかの理由から、漢語外来語が増補されていった——この分布からそのような予想が立つ。

また、この分布に基づけば、「倭訓栞」という書名は、和語を示していくという態度を明示することがそもそもその由来であるとも考えられる。その上で、余白部における大量の漢語の増補という行為によって、タイトルとのずれが生じたといっても過言ではない。この点については後にも触れるが、清逸本との比較を通じ、別稿にてあらためて検証したい。

6 排列との関わり

平井（2011）で述べたように、自筆本倭訓栞の排列には同じ典拠からの用例が同一箇所に纏まって掲出されることがある。

まず、罫線部における全ての漢語について、その排列を以下の通り示す（oは表、uは裏を表す）。

巻 丁数（表裏） 見出し項目

1	34u	あんない	3	48u	しやく
2	47o	かじやう	3	49o	しだらでん
2	48o	かつこう	3	50o	しゆらい
2	48o	かうさく	3	50u	しんぼち
2	53o	きく	3	50u	しんざう
2	54u	きしやう	3	57o	ずさ
2	55o	きせいだいとこ	4	02u	せうそこ
2	62o	くたら	4	03o	せうふ
2	65u	くのえかう	4	03o	せちゑ
2	66o	くきら	4	04o	せうえう
3	02o	けふそく	4	33u	ちうじやく
3	02u	けさん	4	33u	ちよつか
3	03u	げす	4	33u	ちやうど
3	03u	けさう	4	34u	ちよく
3	03u	げじ々々	4	45u	てへん
3	04o	げざん	4	45u	てんたう
3	04o	げんまい	4	46u	てんじん
3	15u	こじ	4	46u	でんがく
3	20o	こんでい	4	51u	どら
3	29o	さへき	4	56u	とうしみ
3	29o	さえ	4	58u	とてつ
3	35o	さふら	4	58u	とんぢやく
3	36o	さんば	4	58u	とつさ
3	39u	じねんこ	5	06o	なし
3	39u	じねんじよ	5	16u	にようぼう
			5	37o	はかせ
			5	51o	ふくさ
			5	51o	ふけ
			5	57o	へど
			5	57o	へび
			5	58u	へいぐはい
			6	04o	ぼけ
			6	05o	ほゝてふ
			6	05u	ほら
			6	14o	まけ
			6	32u	みしん
			6	49u	めんぴ
			6	50u	めうじ
			6	50u	めうだい
			6	58u	もかう
			7	06u	やほち
			7	17u	ゆうしよく
			7	17u	ゆうひつ
			7	30u	らつし
			7	30u	禮紙

7	30u	轟地	2	31o	かくぐはい
7	31o	りちい	2	31u	かうるい
7	31o	りつしんべん	2	32u	かうり
7	31o	りつしん	2	41o	かうじ
7	31o	りつば	2	41u	かうせん
7	31u	りふご	2	50u	きちん
7	31u	りそく	2	51o	ぎぼうし
7	32o	るす	2	51u	きく
7	32o	るふ	2	52u	きつぱり
7	32o	るいたい	2	53o	きちやう
7	33o	れてぐ	2	53o	きつしく
7	33o	れんじやう	2	54o	きうじ
7	33o	れいもつ	2	54o	きやうさく
7	33u	れんぎ	2	64u	くはんにふ
7	33u	れんじ	2	66o	くぜる
7	33u	れふぶ	2	66o	くはきう
7	34o	ろうさう	2	67u	ぐご
7	34o	ろれつ	2	67u	くこん
7	34u	ろくど	3	01u	けかち
7	39u	わうやう	3	02o	げしにん
7	46o	ゑぼし	3	02o	けんし
7	53o	おし	3	02u	けいぐはい
			3	02u	けうこつ
			3	02u	けち
			3	03o	けつく
			3	03u	げほう
			3	14o	ごふく
			3	14o	ごき
			3	17o	ござ々々
			3	17u	こうぶつ
			3	17u	こんぜう
			3	17u	こうやう
			3	17u	こつ
			3	18o	こうびん
			3	18o	こうりやう
			3	18u	こつけい
			3	18u	ごくだふ
			3	19o	こんじん
			3	20o	こう
			3	20o	こふ

近接した項目における語形と排列との対応が顕著であることは平井（2011）で述べた通りだが、漢語を抜き出しても語形や意味の連続性にそれがよく表れていると言えよう。次に余白部についても取り上げ、合わせて考えてみたい。

上述の通り余白部では漢語の増補の連続が目立つが、「あ〜こ」部までを抜き出し、丁数との対応を見ても、次のようになる。

1	23o	あんどう
1	26u	あんばい
1	27o	あいさつ
1	27o	あふりやう
1	29o	あんず
1	37u	いづぶくいつせん
1	50u	いんす
1	50u	いんでん
1	52u	いみ
1	55o	いつそ
2	07o	うどんげ
2	08o	うろん
2	14u	えんてい
2	18u	をちど

自筆本倭訓栞は、平井（2010）で示した通り、和綴で製本した後に余白部の増補を行ったことが明らかである。そのため、同一の面（●丁オ/ウ）に収められているものはもちろんのこと、見開きに該当する連続

した2丁の裏と表が一連の単位となる。それを踏まえると、余白部に出現している漢語にも、顕著な連続性のあることが分かる。

ここで、連続する「あんばい（塩梅／按排）・あいさつ（挨拶）・あふりやう（押領）」を取り上げて考察する。

あんばい 羹を和するにいふは書の鹽梅の訛也といへり○按排布置の意にいへる辞もあり

あいさつ 挨拶と書き黄樹緑葉のおしあひたるを黄挨緑拶などへり辞書に挨は推也拶は逼也と見えたり

あふりやう 押領と書き東鑑に押領使あり日本紀に押使見えたり

ここに掲げた語釈について、所引資料を確認すると、「辞書」「東鑑」の名は見えるものの、3項目を繋ぐ共通した典拠名などは記されていない。このことから、とある（漢語を載せた）典拠を手元において漢語を抜き書きして、そのつど余白部に増補したのではなく、少なくとも、

色々な典拠からの漢語の抜き書き
→五十音順に分別したメモの作成
→そこから一まとめに増補

という流れが考えられる。つまり、漢語の増補を念頭に置き、特定の手控えのようなものを構築していたことが窺えるのである。この場合、特定の典拠を追加することによって、漢語の用例を意図的に増補していったということが推測できる。

日常的に語彙を収集していた土清は、和語を中心とした辞書を志し、雑多な語彙から成る手控えから和語のみを抽出して編纂を行っていったとも考えられる。しかし、余白部において多くの漢語が集中的に増補されている点を考えれば、少なくとも和語と漢語を対立関係におき、区別した手控えを利用していたと考える方が自然であろう。

余白部の編纂にあたって、「収録語彙の拡大に伴って、漢語についてもある程度の量を増補していくことにしよう」という編纂態度・編纂方針の変化があったことを指摘できよう。それはすなわち、和語のみでは足りないもの、つまり各語種（特に漢語）を含んだ総体としての日本語に意識が向かっていったことを物語っている。そしてここに、起稿時につけたタイトル「倭訓」が持つ意味の変容が認められるのである。

なお、一部ではあるが、余白部では次のように外来

語にも漢語と同様の連続性が見られる。

4	03o	ぜぞ
4	03o	せいらす
5	57u	へいさらばさる
5	57u	へいさるぼるこ
5	58u	べんがら
5	58u	べぐう

外来語もまた、外来語を増補するための手控えを利用し、折に触れて余白部に追記していったことが分かる。ただし、現代と異なり外来語をカタカナ表記で区別するようなことはせず、原則として漢字表記が為されている。漢字文献に見られる外来語を採取し、漢語と同様の意識で、すなわち和語とは異なるものという意識で増補が進められたと考えられるのである。

翻って、当初、罫線部から編纂をスタートさせた段階では、和語、或いは和語とみなせるほど日常に溶け込んだ漢語を意識的に選び取っているということが考えられる。

また、平井（2010）では、罫線部であっても各部の末尾に記されたものは比較的に（おそらく余白部成立前に）追記されていた可能性を指摘している。罫線部もいくつかの段階で考察せねばならぬかもしれない。この点に関しては後考に俟ちたいが、次のような点を指摘しておく。

上述の通り、罫線部には例外的な形で外来語が掲載されている。罫線部に載せられた外来語は次の4項目である。

6	08o	ほるとがる
7	30u	らう
7	32o	るうだ
7	32o	るすん

よく知られた日本語の特性として、ラ行から始まる和語が期待し難いため、3項目がラ行に属するという事は、ラ行項目の例外として別途処理すべきであろう。問題となるのが残り1例であるが、これは「ほ」部の末丁に記されている最終項目である。すなわちこの外来語については、罫線部が概ね成立した後、新たに付け加えられたものである可能性があるのである。尚よく検討したい。

7 まとめ

自筆本倭訓栞では、明確な意識を以て語種を分類している。そして、起稿当初は和語を中心とした語彙を収める編纂方針であった。やがて、漢語や外来語をも含んだ日本語の総体を示すための辞書へと編纂方針を変更し、収録語彙を拡大していったのであった。

注

- * 1 現在所在不明の自筆稿本も存在することが指摘されている。尾崎知光（1984）「倭訓栞大綱 解説・資料」（勉誠社）を参照のこと。
- * 2 整版本における「凡例」及び「大綱」に対応する自筆本の「総論」にも、「雅語あり俗語あり雅語に讀書詞あり詠歌詞あり俗語に官府詞あり叢林詞あり」「倭語に似て漢語あり韓語あり梵語あり蠻語ありこれらも【悉く】類をもて聚めぬ」とほぼ同様の記載がある。
- * 3 青木伶子（1986）では、倭訓栞における「倭訓」の意味するところについて詳細に検討している。この論文発表の後、倭訓栞諸本の調査範囲が飛躍的に向上したため、あらためて検証していく必要がある。
- * 4 国立国語研究所の語種辞書「かたりぐさ」では、次

のような基準によって語種を定めたことが示されているが、完全に客観的である語種認定というものの難しさが伝わってくる。<http://pj.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/houkoku3-8.pdf>

参考文献

- 三澤薫生（2006）「谷川士清自筆『和訓栞』について」（和洋国文研究41）
- 青木伶子（1986）「倭訓栞と和字正濫鈔」（『国語史学のために 第三部 語誌・語史』笠間書院）
- 平井吾門（2010）「『倭訓栞』研究の課題と展望」（日本語学論集6）
- 平井吾門（2011）「谷川士清自筆本倭訓栞の掲出語の排列について」（日本語学論集7）
- 平井吾門（2012）「自筆本『倭訓栞』増補の展開について」（日本語学論集8）

謝辞

本研究はJ S P S 科研費26770159の助成を受けたものです。

(2015. 8. 3 受理)